

埼玉親善大使・フィンドレー大学奨学生レポート 最終レポート
成長の年

現在、私は日本に帰国し、大学で研究の日々を送っています。今一度、この10ヶ月間を振り返ってみると、大変実りのあった留学であったと実感しています。英語能力やエンジニアスキルはもちろんのこと、色々な面で成長できたと思えました。今回は最終レポートということで、この留学生活を通して、学んだことを皆さんと共有したいと思います。



卒業式にて

■ 客観的な視点の大切さ

日本でずっと過ごしていると、どうしても日本からの視点で物事を考えてしまいがちです。例えば、なんで空気が読めないんだろう、どうしていつも集合時間に遅れるんだろうなど、異なった価値観の人と触れ合っていると、日本の国民性と全く異なる行動にしどろもどろしてしまうことが多々あります。そこでイライラしてしまい、投げ出すことは非常に簡単です。しかし、ここでの行動が成長できるか、できないかの重要なポイントになると思います。

こういう時に、私がいつも思い出す言葉があります。

「日本が最も異常で、非常識な国だと思え。」

これは、私が中国深センで2週間のインターンシップを行った際に、最も印象に残っている言葉です。私が現地の従業員とうまくいっていなかった時、インターンシップ先の総経理から頂いた言葉です。この言葉が意味することは、日本からの視点で物事を捉えるのではなくて、現地の文化や価値観に沿って物事を考えるべきということであり、私が常に気をつけていることです。例えば、中国では平気で割り込んでくるような光景を見ることができますが、日本から見れば非常識かもしれません。しかし、もし私が中国で生まれ、育ったのなら同じ行動をするでしょう。一つ一つの行動にはその国の文化が根付いており、それを理解せずに批判してしまうことは、勿体無いことなのです。

アメリカに渡って、今まで会わなかったような人々と会い、交流を深めることができました。イスラム圏の人と話をしたのも初めてでしたし、アフリカ人と言い争いをした経験も初めてでした。その中で、上記で述べたように、日本からの視点で物事を見てしまうと、他人事で終わってしまい、自分の糧にならないのだと実感しました。難しいですが、自分の価値観を広げるには、まず自分の価値観を捨てることが最初のステップだと思います。



女装した私と中国人の友人

■ 常に挑戦する心構え

フィンドレーはとても過ごしやすい町で、ニューヨークなどの大都市とは違い、住民はのんびりしています。また、小さい町なので大都市と比べると、できる事が少なく、何もせずに一日を過ごしてしまいがちです。大学にも同じ事が言え、刺激を求めていた私は少々物足りなさを感じていました。しかし、刺激が無ければ、自分から刺激を生み出せば良いことであり、挑戦する環境がここフィンドレーにはあることに私は気づきました。また、教授や学生も挑戦す

る学生には強く支援し、温かく見守ってくれます。そのおかげもあり、国際ディスカッショングループを始めとして、色々なことに挑戦することが出来ました。また、多種多様な留学生がフィンドレー大学には在籍しているので、アグレッシブな学生を見つけ出すことも容易です。日本ではどうしても流れに身を任せて過ごしてしまいがちでしたが、留学中はこの環境を有意義に利用することに注力してきました。

今まで、渡米前の大学時代は流れに身を任せて時を過ごしてしまいがちで、授業や宿題に力を注ぐだけで、積極的に動いていなかったと思います。特に、機械系の学生ともなると、授業が大変でレポート作成で時間が取られてしまい、中々新しいことに挑戦することが難しいと思います。しかし、この10ヶ月間の留学では程よく勉強し、考える時間もたっぷりありました。今、振り返ってみると、この適度な忙しさがとても私には良かったと感じています。でなければ、全く新しい世界を見ずに終わっていたかもしれません。

理系学生は、どうしてもその環境のせいもあり、与えられたことのみ注力しがちで、視野が狭くなってしまいう傾向があります。また、私の大学ではキャンパスが別れているため、他学部の学生との交流が大変少ないです。専門分野を極めることはもちろんですが、全く違った世界を知り、自分の創造性に磨きをかけるためには自分の領域外のこと挑戦する姿勢が大切だと思います。今後とも、自分の視野を狭めることなく、色々なことに挑戦していきたいです。

■ 日本のものづくり

この留学で自分にとって大きかったことは、生のものづくりを経験できたことです。それも、学生時代に海外で経験できるのは大変貴重で、沢山の事を学びました。その中でも、日本のものづくりが世界のトップクラスになれた理由の一つを自分の中で見つけることができたことは私にとって大きな発見でした。それは、日本の文化・国民性です。例えば、日本では、部下の責任は上司の責任にも成り得るため、上司からのマイクロマネジメントが多々入ります。このマイクロマネジメントはアメリカでは悪い意味でよく使われ、過干渉として評価されます。しかし、これは上司が部下に対して指導を密にするということでもあり、人材が育ちやすく、人材の流動性も少ないです。これは、日本とアメリカの平均勤続年数を比べて見てもわかりますが、日本は約12年でアメリカは約7年です。これを工場レベルで見ると、日本の方が現場の従業員の勤続年数が長いために技術の継承が容易で、現場のレベルが高い、と駐在員の方からよく伺いました。

一方で、アメリカ人と一緒に働いていると、自立性を非常に求められます。また、同僚や部下に対しての対応も公平で、ハラスメントにはかなり敏感です。このような環境は、自分磨きには最適で、パフォーマンスをしっかりと評価してくれます。そのため、日本とは違い年棒制をとっているところが多いなど、成果主義な側面が大きいです。一方で、長期的なプロジェクトには不向きな考え方であると感じました。というのも、目先の結果を欲するがために、長期的な視点を疎かにしてしまいがちだからです。

今、日本ではグローバル化を謳って、英語を社内公用語にしたり、外国人の雇用を増やしたりと、欧米化をたどっていますが、長期的なスパンを必要とするものづくり分野では一概に良しとは言えないのではないかと思います。今後、日本のものづくりはどうあるべきなのか、どのようにして世界をリードしていくのか、私のこれからの課題として考えていきたいと思っています。

■ 英語学習の心構え

英語を学ぶことは英語圏留学の最大の目的だと思います。しかし、よく言われますが、英語はあくまでツールであって、そのツールの取得を目的としてしまうと、そのツールの取得すら危うくなります。つまり、留学では、言語を使って何がしたいかが重要であり、どれだけその言語を用いて行動したかが言語を習得する鍵になります。なので、英語の勉強をすることにのみ満足してしまうと、英語が身につくのが遅くなってしまったと感じました。

私は、大学ではもっと学内の多様性を活かしたいという思いから、ディスカッションイベントを立ち上げましたが、結果的にこのイベントを通して、英語能力が格段に上がったと思います。特に、授業や机上での英語学習にのみ集中してしまうと、飽きやすく、疲れやすいのに加え、生きた英語を身に着けることができません。また、限られた場面でのみ使われるイディオムや単語は、その場面に飛び込むことでしかしっかりと身につけることができません。言語学習において大事なことは、頭の良さや勉強量ではなく、経験の多さだと私は思います。そのため、いつも同じ友達と遊んだり、同じ内容を喋るのではなく、様々な環境に飛び込み、多種多様な人々と新鮮な議論を重ねることが重要です。



みんなで作ったかまくら

最後になりますが、この留学で私を支えてくださった皆様にお礼を申し上げます。完璧なサポートを常に提供してくださった埼玉県職員の皆様、厳しくも優しい指導で常に私を見守ってくださった川村先生、質問攻めでも常に笑顔で答えてくださったニッシンブレキオハイオの方々、辛いときにいつも側にいて支えてくださった留学生や現地の方々など、沢山の方々にお世話になりました。素晴らしい経験と素晴らしい人達に出会えることができたこの機会を頂けましたこと大変感謝しております。ありがとうございました。



カナダを背景に川村先生と